

原 著

宮城学院女子大学生活文化デザイン学科における 被服構成実習の実践と課題

Current Situations and Perspectives on Practical Education of Clothing Construction at Miyagi Gakuin Women's University

加藤博子* 大久保尚子**
Hiroko KATO Naoko OKUBO

This report is about situations of practical education of clothing construction at Miyagi Gakuin Women's University for eighteen years since 1997. In order to understand recent tendency lacking basic skills of sewing, we asked 105 students from 2009 to 2014 who took the class of practical education of clothing construction how many works on three-dimensional (3D) construction of clothing they made at junior high and high school. The result was that most of the students have less experiences of making clothes as 3D construction of clothing in the class of home economics at school. This paper discusses about reasons and the importance of teaching materials of clothing practice at junior high and high, especially at junior high school. The students who would be teachers in the future should build up skills of 3D construction of clothing through the practical education of clothing construction that is one of subjects of teacher-training program at Miyagi Gakuin Women's University. After that, they would make suitable choices of teaching materials of clothing practice at junior high and high school and will be able to impart knowledge to the younger generation.

Keywords: three-dimensional construction, teaching materials of clothing practice in junior high and high school, subjects of teacher-training program
立体構成、中高家庭科被服教材、教科に関する科目

1. 緒言

宮城学院女子大学生活文化デザイン学科、専門科目の被服構成実習は、中学校および高等学校教諭一種免許状（家庭）の教科に関する科目（必修）として位置づけられている。これらの科目においては、立体構成の基礎を習得し、さらにそれらを次世代に還元することを目的として指導を行っている。実習作品としては上衣、下衣の基本形であるブラウス、スカート、さらに子供用ワンピース、ベスト、ショートパンツ、リメイク作品の製作を行い、製作工程において採寸の方法、製図の線のひき方、布地や接着芯の扱い方、手縫い、ミシン縫い、ロックミシン、洋裁用具の使い方などの技術を解説し、実習への取り組みを通し学生が将来教職に就いた時に活かせる基礎力と応用力を習得できるよう指導している。

近年、大学によっては実習時間数が限られている中で手描きの製図を省略して既製のパターンやCADを用いて製作作品数を多くする、2分の1縮尺モデル製作実習を行う、など様々な工夫がなされている¹⁾。大学における被服構成実習の手段や方法は多種多様であるが、基礎を確実に習得しさらに応用できる創造力を養うことが重要であると

考える。そこで本学の被服構成実習では被服構成の原型理論を説明した後、上衣では上半身原型を使用したブラウス製図を、下衣では基本のセミタイトスカート製図を行っている。手描きの原型製図や仮縫いは時間がかかるという問題もあるが、プラス面の方が大きい。なぜなら手描きによって原型理論を考えながら製図を描くことができ、仮縫いによって早い段階で立体構成のイメージを持つことが可能となり、さらに原型からの製図や仮縫いで各自の体型にフィットする作品を作ることでモチベーションも高まるという利点があるからである。

しかしながら近年の被服構成実習においては受講学生の縫製技術や被服に関する基礎知識の欠如が著しい。背景には中高の家庭科被服分野での学習に問題があると考えられる。そこで今回本大学学生に過去の家庭科被服作品について調査を行い、その現状と問題点の把握を試みた。結果として近年の中高家庭科で製作する作品は手芸や小物類が多く立体構成作品製作の経験者が極めて少ない状況が明らかになった。それらの教材は家庭科の中の限られた時間内で「被服」として選択されたものであるが、小物や平面構成のみでは立体構成のイメージや人体と被服の密接な関係を

*宮城学院女子大学非常勤講師 **宮城学院女子大学

把握することができない。更に教材の選択によっては、布地の扱い方、手縫い、ミシンなどの縫製の基礎も疎かになりかねない。

本稿は、このような状況下における今後の被服構成実習の課題を検討する資料として、以下のような内容を報告するものである。「2. 被服構成実習教育の実践」では本学における過去18年間の被服構成実習の実践の概要を、受講者数、教材の変遷等も含めて報告する。その上で「3. 被服構成実習受講者の現状」で近年の受講生の状況、および中高家庭科被服分野における作品製作体験についての調査結果を示し、学習指導要領の変化との関係を考える。そして最後に「4. 今後の課題」として、このような現状の中で求められる本学における被服構成実習の今後の課題を整理するとともに、履修学生たちが将来指導者になった際に望まれる被服分野の教材設定についても考察したい。

2. 被服構成実習教育の実践

以下では加藤が授業担当者となった1997年度以降の本学生活文化デザイン学科（1997年度から1999年度まで家政学科、学科改組を経て2000年度から2008年度まで生活文化学科）における、立体構成を扱う「被服構成実習」の授業実践について述べる。1997年度から2008年度入学生までは「被服構成実習 A」（1997年度から1999年度までは1年次、2001年度から2008年度までは2年次通年2単位）、2009年度入学生以降は「衣服製作基礎実習」（2年次後期1単位）および「被服構成実習 A」（3年次前期1単位）として実施している。

(1) 被服構成実習受講者数の推移

1997年度から2014年度までの被服構成実習受講者数の推移を表1、図1に示す。ただし2000年度、2010年度のブランクはカリキュラム移行期となっている。

さらに、参考として生活文化デザイン学科入学者数及び教職希望者数（実習履修時）を加える。

図1で2010年度以降の被服構成実習受講者数は実習選択時（2年次後期衣服製作基礎実習として履修）の人数を示し、実習選択時の教職希望者数を内訳で表している。折れ線で入学者数（入学時）を示す。

表1、図1を見ると、家政学科の時代（1997～1999年度）は平均して55名で受講者数は安定しているが、2001年度以降は学科改組や入学者数の変動に少なからず影響を受け、被服構成実習受講者数は減少している。これは、カリキュラムの大幅な変化に伴う科目選択の多様化や教職志望者の減少傾向を反映したものと考えられる。

また受講者数減少以外にも顕著な特徴として、家政学科の時代と比べて近年の学生の被服に関する基礎知識や縫製技術に質的な低下傾向が生じている。この変化はいわゆる「ゆとり教育」を受けた学生たちの在学期間とも重なって

表1 被服構成実習受講者数

年度	被服構成実習A ()内は教職希望	衣服製作基礎実習 ()内は教職希望	入学者数 (入学時)
'97	55(32)		66
'98	55(34)		63
'99	59(38)		63
'00			
'01	37(22)		69
'02	14(10)		70
'03	43(20)		69
'04	20(17)		66
'05	50(39)		90
'06	39(11)		79
'07	36(25)		84
'08	26(24)		78
'09	33(25)		89
'10		44(26)	83
'11	30(20)	17(8)	71
'12	9(4)	17(12)	75
'13	11(9)	21(13)	65
'14	18(11)	30(19)	87

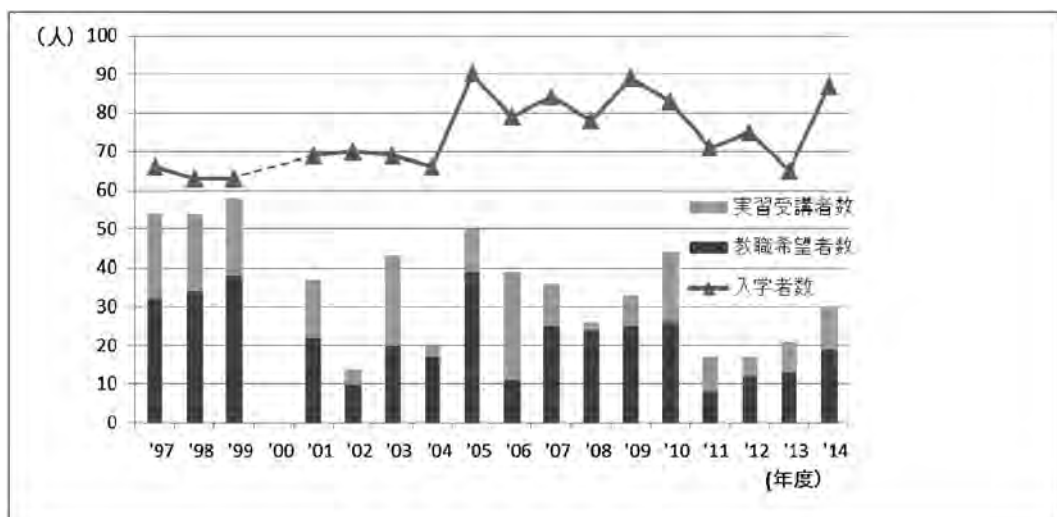


図1 被服構成実習受講者数（教職希望者数を含む）の推移（1997～2014年度）

いる。これについては下記の3.被服構成実習受講者の現状(1)学生の状況で後述する。

一方で、モチベーションが高く目的意識も高い学生が集まれば人数にかかわらずレベルを上げた指導が可能となる。例えば、教職課程の途中放棄や実習が長時間の割に単位数が少ないという理由からか、2010年度のカリキュラム移行直後に受講者数44名（2年次）から30名（3年次）と大幅に減った学年があったが、この時受講を継続した学生は全員積極的に作品製作に取り組み、一年間で6〜7作品を製作することができた。ただし通常は一年を通して平均5作品である。

以上のように年度毎に人数の増減はあるが、このことは実習に影響を及ぼさない。

（2）教材の変遷

1997年度以降、被服構成実習で扱ってきた教材の変遷について述べる。

上衣について

ブラウス製作

採寸をした後原型を製図し襟付き袖付きの前開きブラウスを製作する。素材は取り扱いの簡単な木綿100%とする。ブラウスには肩ダーツ、胸ダーツが入り、襟ぐりバイアステープ始末のシャツカラー、セットインスリーブ、胸ポケット、ボタンホールが含まれる。

1997年度から2000年度までは長袖（スラッシュ開きカフス付き）タックインブラウス製作を行った。2001年度から2005年度までは同様のデザインで持ち出しなしカフス付き七分袖として工程を減らし、2006年度以降はゆとり教育世代のことを考えて更に工程を減らし、半袖に変えている。その際カフス付き長袖については解説のみ行った。

応用として襟や袖のバリエーション、開きの種類、見返しの解説を行った。

また、前開きの計5個のボタンホールは当初手縫いで行っていたが2001年度からミシンに変えて時間短縮を計った。ただし1997年度から現在に至るまで、練習用の布で手縫いとミシン縫いのボタンホールをそれぞれ2個ずつ作って2種についての比較検討を行っている。

2012年度から襟、袖、ポケットなどの色の変更を自由とした。

下衣について

セミタイトスカート製作

秋冬物の裏付きスカートを製作する。スカートに適した素材として表布にウール100%、裏布にキュプラ100%を用いて一度に二種の素材の取り扱いについて学ぶこととする。

採寸した後基本のセミタイトスカート製図（ダーツ1本）を行う。その後体型によってはダーツ2本にする場合を解説する。近年はウエストとヒップの差が少ない体型が多く、ほとんどはダーツ1本で製作している。

デザインは1997〜2004年度は後ろ開きセンターベンツタイトスカートで、2005年度からインパーティドスカートに変え脇開きにして工程を減らし、2008年度からは一部の希望者のみインパーティドスカート、全体は脇開きのセミタイトスカートとしてさらに工程を減らした。2005年度からはそれまでと同様に額縁仕立てを含むセンターベンツを部分縫いで体験し、2008年度から額縁はなしとしている。いずれの場合も裏付きで素材の違いに触れている。裏スカートは2005年度からサイドスリットとする。

応用としてフレアスカートなど数種のデザインのスカートについて、製図や縫製方法を解説した。

ショートパンツ製作

下衣においてスカートの形態と全く異なるパンツについての立体構成を把握することを目的とする。夏休みの課題として既製の型紙と解説を用いたが、仮縫いを除いたすべての工程を自力で行うことにより立体構成への理解を深めた。2000年度からデザインをカーゴパンツに変え、2011年度からはサイドポケットの有無を自由とした。

カリキュラムの変更により2010年度から実習が2年次後期から始まることとなり、夏休みを利用した課題製作が不可能となったため、2010年度は冬休みの課題としてパンツからスカートへのリメイクを行った。リメイクでパンツをほどこ際にその形態把握を体験し、さらに付加価値でフリルやテープなどの細かい技術を意識的に取り入れオリジナリティを引き出した。しかし学生がリメイク作品の製作工程においてパンツの形態を十分に把握できたかを疑問に感じ、2011年度からは課題をショートパンツに戻し、既製のパターンではあるが型紙を選び裁断から製作を行うことでその立体構成の理解を深めた。

ワンピースについて

2009年度のカリキュラム変更によりそれまでの2年次通年から2年次後期と3年次前期の半期ごとの実習を行うこととなり、最終的に学年が一つ上がったことから被服構成実習作品のレベルアップを試み、ワンピース製作を行った。2年次でスカート、冬休みにショートパンツ、3年次でブラウスの立体構成を把握しそれぞれの形態を確認しながらウェストはぎワンピースを製作し、その構成要素を把握することを目的とした。ここでは時間短縮のため子供用（サイズ100）の既製パターンを用いている。子供服にはダーツはないが構成要素は婦人服と同じでありウェストはぎワンピースでは一度に上衣、下衣の形態を把握できるという利点がある。さらにサイズが小さい分縫う分量が少なく時間短縮で作品完成に至る。このことから2010年度から現在に至るまで子供用ワンピースを教材として活用している。デザインは2010〜2012年度はフラットカラー付き、2013〜2014年

度は襟なしで襟ぐり見返し始末を指導した。2010年度から必ず行っていることは、前開き3つのボタンホールを手縫いにするここと、完成後に必ず一つ以上の付加価値をつけることで、付加価値として想定できるリボン、フリル、ピンタック、ギャザー、フレアー、コサージュ、シュシュ、髪かざり、巾着などの作り方を指導した。

ただし2011年度前期に限り実習作品の順序が異なっている。3月の震災で被服実習室が使用できず教室や自習室で被服実習を行ったため、実習環境が整う前の教材として子供服から取り掛かった。当時の履修学生は3年生で、その前年度(2年次)にスカートを縫った経験があったのでスムーズに子供用ワンピースを製作することができた。

その他

リバーシブルベスト

2010年度から子供用(サイズ100)リバーシブルベスト製作について解説し、一部の学生は実際に製作した。半袖ブラウス、子供用ワンピースを提出後に残り布を用いて製作を行い、各班で協力して一つのベストを完成させるなど実習の進行状況によって一人一作品と限らない。いずれの状況でもどんでん返し、毛抜き合わせについて解説し、見返しを控える場合との相違を指導した。

自由作品

2010年度から課題の作品完成後に残り布などを利用した自由作品製作を試みている。時間的には実習約1回半分で、扱う布やテーマを自由としたところ、これまでに婦人ベスト(一重、裏付き)、婦人リバーシブルベスト、裏なしギャザースカート、サロンエプロン、膝丈イージーパンツ、リメイクスカートなど個性的な作品を完成した。特に2010年度はカリキュラム移行期で履修学生が13名と少なく全員が1~2個自由作品を製作した。一人一人異なる作品について解説、指導を行っているが、学生はお互いの作品を手にとって縫い方を学ぶことで複数の作品の縫い方を習得し、様々な作品に触れることができた。

以上のように実習における教材の選択に試行錯誤を繰り返している。衣服製作実習から被服構成実習までの一連の流れを通して常に立体構成のイメージを持ちながら作品を製作することで基礎力の習得を習慣化し、さらには将来学生が教職に就いた時の教材の選択に反映することができると考える。

(3) 実習指導

被服構成実習(1997~2014年度)における作品製作工程と実習指導の流れは図2の通りである。実習作品の完成品及び、部分縫いの実物大見本を作成し、プリントと板

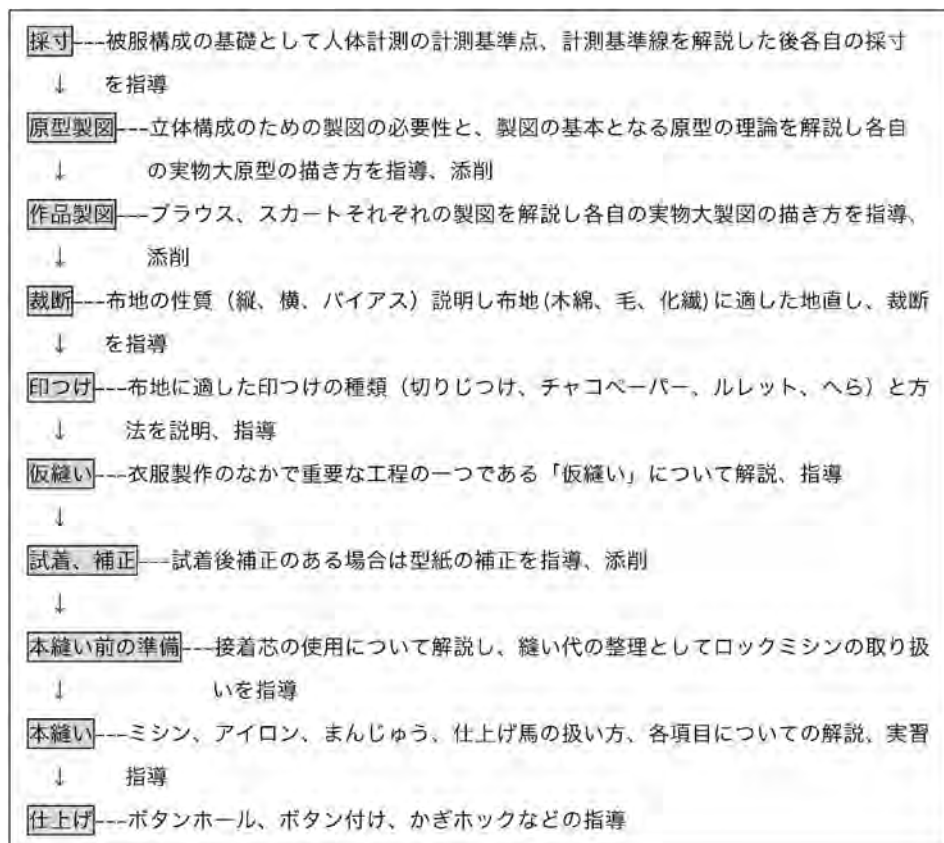


図2 被服構成実習作品製作工程及び実習指導の流れ

書で解説、その後全員、グループ別、個別の実習指導を工程ごとに繰り返し行った。

製図では定規の使い方、線のひき方、切り方を、縫製では布地、鉄の取り扱い、手縫い、ミシン、アイロンなどの基本を、一つずつ繰り返し説明し手元で具体的な指導を行った。その際、実物大完成見本と製作工程ごとの部分縫い見本を用いている。また最終日テスト形式で製作工程、洋裁用語を確認することで被服構成の理解を高め、作品完成後に全員で着装し達成感を共有している。

（4）実習指導の工夫と改善

次に製作工程ごとに行っている工夫と効果について以下に述べる。

〈採寸〉

人体計測の計測基準線、計測基準線を解説し、採寸を正確に行う。不正確な採寸によって仮縫い後補正が大きくなることに注意し、採寸の重要性を体感する。

〈原型製図〉

近年大学、短大における被服構成実習では文化式原型が最も多く使用され、日本の洋裁の歴史において²⁻⁴⁾進化と発展を継続している。文化式上半身原型は背丈と胸囲寸法を用いて容易に製図することができる。ただし2000年に改良されている⁵⁾改良型では、展開における胸ぐせの処理に手間がかかるなどの問題点も指摘されている。そこで本大学では改良前の原型^{6,7)}を用いて原型のダーツを書く時間を短縮している。

応用としてCADによる上半身原型を作製し手描きによる原型との比較を試みる。

スカートではセミタイトスカートを基本製図としている。

〈製図〉

ブラウスでは後ろ肩ダーツ、前脇に胸ぐせを処理して胸ダーツを描き、近年の学生の体型を考慮して脇で前後に1cmゆるみを加え肩先で0.5cm上げて全体のアームホールを増やしている。

スカートでは基本製図から脇線とダーツを多少変更している。最近の学生に見られる特徴として、腰丈が長い、ウエストが定まらない、ウエストとヒップの差が少ないなどが挙げられる。そこで基本製図より脇線の傾斜の範囲を狭め、多くても2cmは超えないようにしてダーツとのバランスを考え、各自の体型に合わせている。近年、生活習慣の変化からウエストにくびれない肥満体型が増えているが、ウエストとヒップに差がほとんどない場合ダーツ分量が取れなくなってしまうので、少なくとも縫い合わせることでできるダーツを確保するために、脇線の傾斜を最小限にして全体のバランスをとる場合もある。更にウエスト位置の自覚がない学生が増え続け、腰丈寸法の長い体型が多くなっている傾向がある。そのため基本製図において腰丈寸法を目安に決める後ろダーツの長さが長くなりすぎるという問題が生じる。そこで製図の段階で後ろダーツの長さを改め、各自の体型を考慮してバランスの良い長さに決め

ている。

〈裁断、印つけ〉

布の縦、横、バイアスの特性を説明し、布目線に注意して裁断を行う。布の裁断はほとんどの学生が初めてで布を持ち上げて紙を切る感覚で鉄を使ってしまうため、裁断の際の裁ち鉄の正しい使い方を指導した。

また、布地に適切な地直し、印つけの方法を指導した。ブラウスではチャコペーパーとルレット、スカートでは切りじつけ、子供用ワンピースではへらの印つけを指導した。

〈仮縫い、試着、補正〉

仮縫いの重要性を指導することによって、次のような効果が得られる。

自分の体型にフィットする服作りができる。

布を扱いはじめる早い段階で完成形を体感できる。

製図で考慮したアームホールやダーツのバランスなども確認できる。

採寸の重要性を理解することができる。

ペアでピン打ちや床上がり寸法を測ることで自分以外の体型を知ることもできる。

ただし、本縫い前に平面に戻すことに抵抗感を抱く場合もあることを考え、時間短縮のために縫い合わせの代わりに押えじつけやピン打ちを行い、縫いも解きも簡単にした結果スムーズに本縫いに移行することができた。仮縫いでは3種の方法（縫い合わせ、押えじつけ、ピン打ち）の見本を人台に着せて提示した。

少数ではあるが近年の成人女子の体型の特徴として骨盤のゆがみがあり、仮縫いによって体型の左右差を目立たないようにすることができた。

また痩せ型や肥満型、スポーツ体型では仮縫いの効果が特に大きい。

〈本縫い〉

完成品見本、各項目の部分縫い見本を毎実習いつでも確認できるように提示している。

各項目の部分縫い見本の例は以下の通りである。

ブラウス…縫い代の整理（ロックミシン）、見返し、接着芯の貼り方、胸ポケット、ダーツの縫い方と倒し方、肩の縫い合わせ、縫い代の両割、襟の作り方、襟付け（バイアステープ始末）、袖の作り方（ぐし縫い）、カフスつけ（スラッシュ開きを含む）、袖付け、裁ち目かがり、見返し裾の始末、三つ折り、まつり縫い、ボタンホールの位置と大きさ（手縫いとミシン）、奥まつり

スカート…縫い代の整理（ロックミシン）、ダーツの縫い方と倒し方、縫い代の両割、ファスナー付け（段階ごとに4枚）、ベルト布（ベルト芯の縫いつけ）、裏スカートダーツ、脇の縫い代片返し（縫い代のきせのかけ方）、裏スカートサイドスリット（三つ折り端ミシン）、中

とじ、表スカートと裏スカートのウェスト合わせ、ベルト付け、センターベンツ、額縁仕立て、スリット、千鳥掛け、奥まつり、星止め、かぎホックつけ、糸ループ

更に学生が将来家庭科教員の職に就いた時に実習の時間に応用することができるように、(2)教材の変遷でも述べた通り教材としてショートパンツ、子供服、リメイク作品を、さらに子供服の付加価値でフリル、ピンタック、パイアステープ、リボン、シュシュ、コサージュ、手さげ、小物入れ等を指導した。

3. 被服構成実習受講者の現状

(1) 学生の状況

中高家庭科において被服製作の経験がほとんどない大学生が被服構成実習を行う際に直面する様々な問題を取り上げる。製図や縫製において次のような現象が見られた。

製図…基本線（平行、直角）を正確にひけない。

紙を線通りに切ることができない。

縫製…布の縦、横がわからない。

まち針の使い方がわからない。まち針で布に刺したまま拗わずふらふらの状態にする。

布を縫い合わせることができず、糊代の感覚で布端を重ねる。縫い代の意味を理解できない。

縫い合わせる時、縫い代を手前にして指先でつまみながら縫う。

玉結びができない。並縫い、返し縫い、まつり縫いなど基本的な縫い方ができない。

ミシンの使い方がわからない。縫い代を左側にしてミシンをかける。

ミシンの下糸の巻き方ができない。

洋裁用語を覚えられない。

この他に説明をしても一度に二つ以上覚えられない傾向が特に近年顕著な例である。

これらの問題は主として高校までの家庭科で立体構成を学ぶ機会が少ないために生じると考えられる。そこで今回被服構成実習履修者に小学校、中学校、高校の家庭科被服でどのような作品を製作したかを調査し、現状を確認した。

(2) 小中高家庭科作品について

調査方法

2009～2014年度の生活文化デザイン学科被服構成実習受講者に小中高家庭科における被服製作作品について調査し、105名から回答を得た。調査では小学校、中学校、高校家庭科被服で製作した作品をすべて記入し、忘れた場合、作品なしの場合も明記することとした。

結果と考察

小中高の家庭科被服作品数を表2、図3に示す。

表2、図3の小中高家庭科での作品数を見ると、平均して小学校では1.8個、中学校では1.1個、高校では1.0個となっている。ただし高校の5種類以上とは被服専攻3名を含み小学校の0種2名は記憶にない場合を含んでいる。図3を見ると、被服専攻以外の高校では作品数が少なくなっているだけでなく全く被服製作を行っていない人数が多く、その特徴が高校だけでなく中学でも見られることがわかる。高校では学校で定めた履修科目が「家庭基礎」であるなどの理由があると思われるが、中学で被服作品0がこれほど多いという結果には注目しなければならない。

図4は小中高で製作する家庭科作品の種類を比較したものである。種類が多いため作品形態の類似した作品はまとめた項目にしている。この結果から作品の種類は多種多様であるが手芸作品や小物類が多く、中学、高校（被服専攻以外）のほとんどの学校で立体構成作品は極めて少ない

表2 小中高における家庭科被服作品数

作品数(個)	0	1	2	3	4	5以上	平均数(個)
小学校	2	32	54	15	2	0	1.8
中学校	26	52	18	6	2	1	1.1
高校	36	49	14	1	2	3	1.0

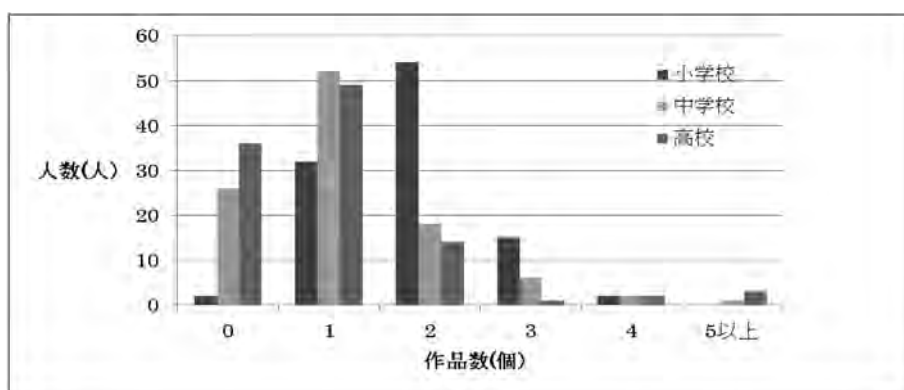


図3 小中高における家庭科作品数

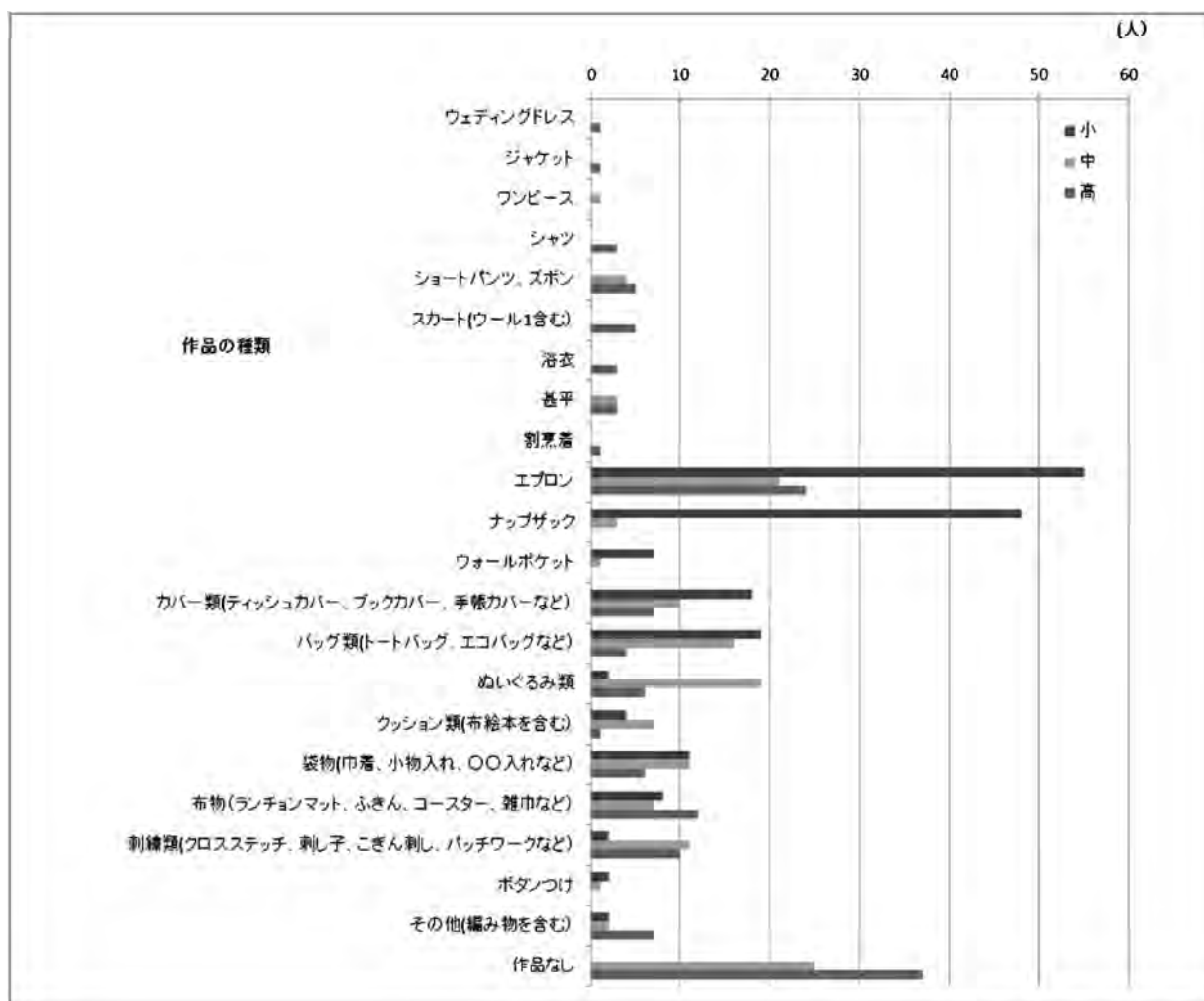


図4 小中高家庭科作品の種類

ことがわかる。図4の家庭科作品の種類を見ると各学校の試みの様子が作品の種類に表れているが、中には被服構成の基礎を学ぶという目的とは異なる意図で選択されたと考えられるコースターやランチョンマット等の題材も見られた。布物や袋物は小学校で作ることができるのであるから、被服構成の知識技能の習得のためには小学校の教材より簡単なものは避けなければならない。また、趣向を変えてぬいぐるみ類を選択している様子も見られた。ぬいぐるみ等は保育分野の課題であった可能性も考えられるが、時間の制約の中で、実質的に家庭分野の製作実習の題材は一つしか選べないのであれば、立体構成に取り組むことが望ましい。

図5、図6では中学、高校それぞれの家庭科作品を種類別に表した。項目は図4より広義とし、平面構成（浴衣、甚平、割烹着）、立体構成（スカート、ショートパンツ、シャツ、ワンピースなど）を設けている。

図5、図6を見ると、中学で18%、高校で27%が被服作品を全く製作していないということがわかった。作品としては中学ではバッグ類が最も多く26%、次いでエプロン

が15%、高校でもエプロンは18%と多くなっている。また甚平などの平面構成は2%（中）、5%（高）、ショートパンツ、スカートなどの立体構成は3%（中）、11%（高）に過ぎない。特に中学では、バッグ類、エプロン、カバー類を合わせると50%近くになっている。中学の教材選択の問題点をさらに明確にするために小学校の家庭科作品を図7に示した。図5、図7を比較すると小学校でナップザックを含むバッグ類、エプロン、カバー類を合わせて92%となっているにもかかわらず、中学でも同じような教材になっていることがわかる。

さらに単独の作品としてエプロンに着目して図4の詳細を検討した結果、小中高と3度もエプロンを製作した学生が5名おり、小中高で2度製作が13名、合わせると小学校から高校までにエプロンを二度以上製作した経験者は18名という結果であった。この結果は人数としては少なく見えるが注目しなければならない事実である。

図4、図5、図6、図7から、小学校を加えて中、高の家庭科被服作品の種類を比較すると、どの段階でも作品としてはエプロンが一番多いという結果であった。これを見

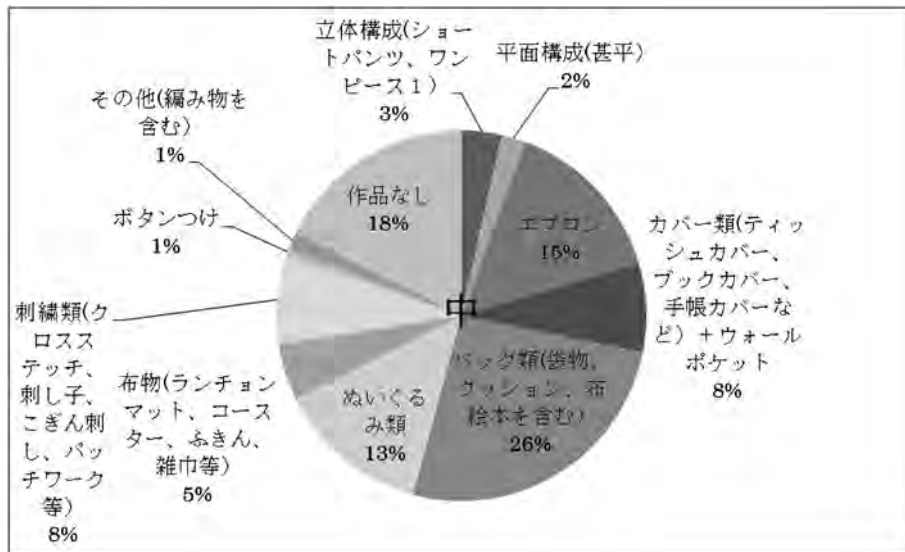


図5 中学校家庭科作品

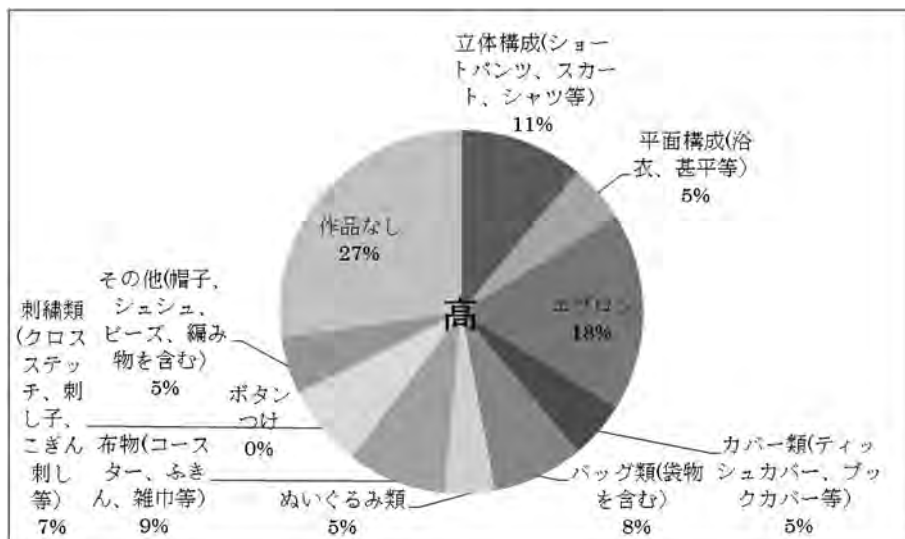


図6 高等学校家庭科作品

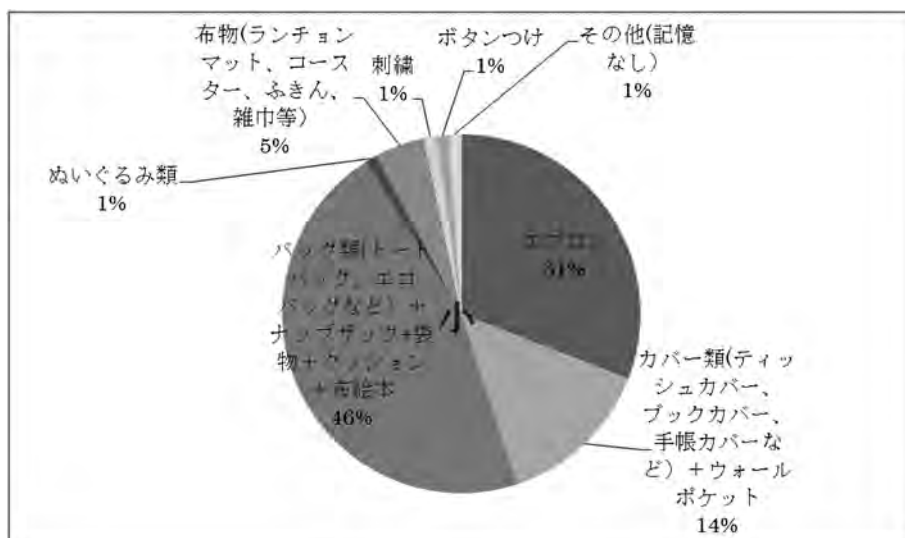


図7 小学校家庭科作品

ると、小学校でエプロンを作る技術を習得できるのであればなぜ中高でレベルアップを試みないのかという疑問が生じる。小中高家庭科指導者の密な連携が必要なのではないだろうか。特に中高では扱う教材に幅を持たせ、一定範囲内で生徒に選択させるなど、同じ教材にばかり出会うことのないように様々な方法を考えなければならない。前述のような小中高でエプロン製作が3度重なる生徒に別の選択の機会があれば、例えば小学校でエプロンを製作した後中学でスカート又はショートパンツ、高校でベスト又は切り替えなしのワンピースを製作し、小中高のいずれの場合にも作品に付加価値を加える（刺繍又はバッグを添える等）というように、少しずつステップアップが可能となる。中学または高校で一つの作品しか作る時間がなくても、デザインやテクニックを変えたり付加価値を加えることによって学習内容を増やすことができる。

中高の家庭科作品のアンケート結果を見ると、刺し子やこぎん刺しなど手縫いの要素を取り入れた個性的な教材はとても興味深いものであったが、全体として手芸の要素が大きすぎる結果となっている。ここで手芸を否定するものではないが、中高では少なくとも一度は立体構成を学ぶ機会を作ることが重要であると考えられる。

以上で明らかになった実態は、学習指導要領の変化を反映していると考えられる。ここで改めて、中高家庭科学習指導要領における被服製作実習の位置づけの変化を確認しておきたい。中学校技術・家庭科、高等学校家庭科のいずれにおいても、「ゆとり教育」を掲げた学習指導要領改訂（中学校1998年12月改定、高等学校1999年3月改定）において被服製作実習の位置づけが大きく変化した。中学校では2002、高等学校では2003年度以降実施された学習指導要領で中高家庭科の授業を受けた世代は、大学入学がおよそ2006年度以降に当たり、本論で行った作品アンケートの結果は、この学習指導要領下での授業の実状を示すものといえるであろう。

中学校技術・家庭科では、1992年から実施されてきた従来の学習指導要領では、中学校技術・家庭科では、全11領域のうちの一つである「被服」領域は「日常着及び簡単な手芸品の製作を通して、生活と被服との関係について理解させ、衣生活を快適にする能力を養う」ことを目標とし、内容として、簡単な被服の製作について、被服の構成を知り、製作計画を立てることに始まり、材料の選択、採寸及び型紙の活用、裁断、本縫い、仕上げ、適切な縫い方、縫い代の始末、裁縫用具、ミシン、アイロンの扱いまでの各事項を指導することになっていた⁸⁾。また題材は「立体構成の基礎について理解させることのできるものを適切に選定するものとする。」とされていた⁹⁾。この時期の指導要領では技術・家庭科全体の11領域から7領域以上を履修させることになっていたが、一般的な共学校あるいは私立女子校では「被服」領域が全く扱われないというケースは稀であったと考えられる。これに対し、2002年

度から実施された学習指導要領では、教科全体が「技術」と「家庭」の二分野に大別され、被服領域は、「家庭」分野の「A 生活の自立と衣食住」中、すべての生徒に履修させる基礎的基本的な内容四項目の一つ「(3) 衣服の選択と手入れ」、および、生徒の興味・関心等に応じて選択して履修させる内容一つ「(6) 簡単な衣服の製作」に置かれている。この改訂の要点として学習指導要領解説書には「内容の厳選」が謳われ、その一つとして「取扱いが行き過ぎになりがちであった改訂前の「被服」領域の「簡単な被服の製作」については、基礎的・基本的な内容に限定して選択的に履修させる内容とする」ことが示されている¹⁰⁾。学習指導要領解説では上記「(6) 簡単な衣服の製作」の「内容の取扱い」については「題材は、基礎的な縫製技術を習得でき、衣服の構成と身体との関係を理解できる観点から、上衣又は下衣を選定する。（中略）和服等の平面構成の基礎が理解できるような題材を扱うこともできる。」としている¹¹⁾。ただし、製作実習の題材が立体構成に限定されなくなったこと以前に、被服製作が、全生徒が学ぶわけではない選択領域として明確に切り分けられたことの影響が大きかったと考えられる。

被服製作が実際にどの程度選択されてきたかを端的に示しているのが、今回の調査結果である。指導要領で示された衣服と身体との関係の理解につながる「上衣または下衣」あるいは「平面構成の基礎が理解できるような題材」の中学における製作例は、わずか5%（図5）に過ぎない。エプロンは衣服とはいえ、バッグや布物と同じく、「(3) 衣服の選択と手入れ」に含まれる補修にかかわる部分縫いの習得を主な目的とする教材と位置づけられていると考えられる。さらに全生徒が学ぶ「(3) 衣服の選択と手入れ」において布と糸で製作する実習が行われないケースもあり得るわけだが、今回の調査では、その割合（作品なし）は18%（図5）であり、稀ではないことがわかる。

高等学校家庭科については、1994年度から実施の学習指導要領において、男女共必修の教科となり、必修科目として従来からの「家庭一般」のほか「生活技術」「生活一般」（全て4単位）のうち1科目を全生徒に選択履修させることとなった。「家庭一般」では「(3) 衣生活の設計と被服製作」の項目のうちに「日常着の製作」が含まれていたが、施設・設備や担当教員の確保等の問題などがある場合は当分の間、後半2単位を他の科目の履修で代替できるとされた「生活一般」においては「(5) 衣生活と被服製作」の項目は必須ではなく選択履修するものと位置づけられた。この時点で既に被服製作の扱いが実質的に縮小する方向に動き始めたことになる。さらに2003年度から実施の学習指導要領では、「家庭一般」を改善した「家庭総合」、「生活技術」（各4単位）と並び、新たな科目として「家庭基礎」（2単位）が設けられた。「家庭総合」では「(4) 生活の科学と文化」のうち「(イ) 衣生活の科学と文化」に「(ウ) 被服の構成と製作」が置かれ、題材は「身体の躯幹

部を覆う「衣服」を中心として」扱うことが示されている¹²⁾。「生活技術」では「(5)衣生活の設計と製作」のうちに「(ウ)被服の製作」が置かれるが、題材については具体的な指定はない。「家庭基礎」においては全4項目から成る内容のうち「(2)家族の生活と健康」中に「(イ)衣生活の管理と健康」が置かれている。(2)については「実験・実習を中心とした指導を行うよう留意すること。」とあるが、「(イ)衣生活の管理と健康」の下位項目は「(ア)被服の機能と着装」「(イ)被服材料の特徴と被服管理」の2項であり、製作実習は具体的に示されていない¹³⁾。

今回の調査で立体構成、平面構成の実習を体験した者は「家庭総合」履修者と考えられるが、他の実習題材のうち「エプロン」も「家庭総合」で行われた例が少なくないと考えられる。さらに本学入学者のうち、共学校の出身者は殆どが2単位の「家庭基礎」を履修している。「作品なし」が27% (図5)と三割近いのは、「家庭基礎」において製作実習が行われない結果と考えられる。

平成24年度から実施の新学習指導要領では、中学校技術・家庭科家庭分野においては「布を用いた物の製作を通して、生活を豊かにするための工夫ができること。」という事項が示されている。指導要領解説では「布を用いた簡単な衣服や小物を製作する」ことが指示され、「小学校で学んだ基礎的・基本的な知識と技能などを発展させ、効果的に活用したりして製作ができるようにする。」とある¹⁴⁾。また高等学校の共通教科家庭科の選択履修科目である「家庭基礎」「家庭総合」および新設の「生活デザイン」のうち、「家庭総合」「生活デザイン」には「製作」が含まれ、また3科目とも指導計画に当たっての配慮事項として中学校技術・家庭科との関連を図ることがあげられている¹⁵⁾。

しかし、今回の調査結果からは、小中高で繰り返しエプロンを製作するなど、教育内容の連携がうまく取れているとはいえない現状がうかがわれた。限られた授業時間内で効果的な教育を行うためには、小学校から高校までの8年間に製作する作品の中で、題材の重なりは避けるようにしなければならない。高校で2単位の「家庭基礎」が履修され、被服製作実習が行われない場合が多いことを考えると、特に重要なのは中学家庭科ということになる。例えばショートパンツやウェストゴムのスカート製作等、中学の家庭科被服領域では必ず一つ立体構成を取り入れることが必要である。さらに中高の家庭科において、予め生徒に過去の被服作品を確認した上で実習計画を立てるなどの改善策が急がれる。

4. まとめ

今後の課題

近年中学、高校の家庭科で取り上げられる被服製作の題材にはエプロンや小物類が多く、立体構成の基礎知識、基礎技術を学ぶ機会が少なくなっている現状が、学生への調査の結果から明らかになった。そのため正しい縫製技術の

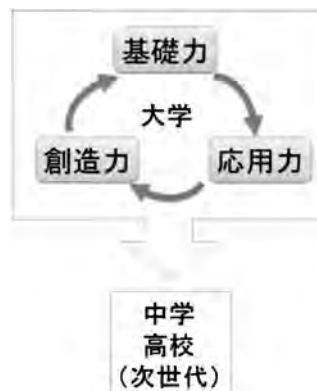


図8 被服構成実習（教科に関する科目）の実践と社会への還元のイメージ

基本が身につけておらず、立体構成のイメージを持っていない学生が多い。そこで本学の被服構成実習では基本を重視して立体構成作品製作の指導を行ってきた。学生はたとえ被服作品製作の経験が浅くても大学で改めて基本を学び、修得することによって将来中高における家庭科指導に生かすことができる。図8に示すように、本学の被服構成実習の実践においては常に創造力を持って作品製作に取り組み、基礎力を固め、応用力を身につけることを目指すものとする。さらに、本学における教科に関する科目としての「衣服製作基礎実習」及び「被服構成実習A」の使命は、指導者となる自覚を持って被服の知識や技術を確実に身につけ、それらを次世代に正しく伝えることのできる人材を育むことと考える。

学生が将来家庭科教員となった際には、小中高の家庭科被服分野の実習で教材が重ならないように注意する、必ず立体構成作品を一つ取り入れるなど、生徒の立場に立って適切な被服実習教材を選択する能力を持つことが望まれる。また、小中高の実習教材に連動性を持たせる、教材がある範囲内で生徒に選択させるなど、現状以上に中高の被服教材の枠を広げる必要性を考慮しなければならない。学習指導要領に示される被服製作の題材の規定は改定の度に緩やかになってきているが、だからこそ教員の側には幅広い対応能力が求められるのである。

また、大学で被服を学ぶことができる学生はごく一部であることを考えると、衣生活の向上のためには中高での家庭科被服の時間を有効に使うことが重要になってくる。中高家庭科の限られた時間の中で「被服」は何ができるかを再考することは、将来の指導者にとっての重要な課題といえるだろう。

現状の被服構成実習では基礎力に重きを置いているが、中高での被服実習のレベルが上がれば、大学の実習ではさらに多くの教材に触れることが可能となる。そのような将来に備えるための試みとして、現在は一部の学生に対して実習で使用した布の端切れなどを利用してベスト、ウェストゴムのギャザースカート、フレアスカート、パンツな

どの応用作品に取り組む時間を設けている。また CAD によるブラウス製図、スカート製図を用いて実際の衣服製作を行う時間も作らなければならない。今後学生の技術のレベルに大きな差が生じた場合は、実習クラス内でレベルに沿ったグループ分けが必要になる時もあるであろう。作業レベルの差が大きくて調整が整わない場合にはグループリーダーとして実習指導のアウトプット練習を取り入れることなども模索している。

以上教職課程被服構成実習の実践においては被服立体構成の基礎力、応用力、創造力を高め、次世代への還元を計ることが重要であり、より良い循環を目指さなければならないと考える。

本稿にあたりご協力いただきました宮城学院女子大学生生活文化デザイン学科副手亀谷恵美さん、アンケートに答えていただいた同学科学生の皆さんに厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 雙田珠巳「被服構成学実習における縮尺モデル製作の取り組み」『熊大教育実践研究』第26号、81-87 (2009)
- 2) 藤田恵子「女子上半身原型製図法の変遷（第2報）—第二次大戦後から1970年まで—」『日本家政学会誌』vol. 52 No. 1、33-42 (2001)
- 3) 藤田恵子「女子上半身原型製図法の変遷（第3報）1970年代から1990年代まで」『日本家政学会誌』vol. 53 No. 1、31-41 (2002)
- 4) 藤田恵子「大学・短期大学の被服製作教育における上半身原型の使用状況」『東京家政大学紀要』第50号、31-38 (2010)
- 5) 中屋典子、三吉満智子 監修『服装造形学 技術編Ⅰ』文化出版局 (2000)
- 6) 文化女子大学被服構成学研究室 編『被服構成学（技術編Ⅰ）』文化出版局 (1992) 第1版第8刷
- 7) 文化女子大学被服構成学研究室 編『被服構成学（技術編Ⅰ）』文化出版局 (2003) 第2版第9刷
- 8) 文部省『中学校指導書 技術・家庭編』、80-84、開隆堂出版株式会社 (1989) 参照
- 9) 同前、81参照
- 10) 文部省『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—技術・家庭編—』、9、東京書籍株式会社 (1999年) 参照
- 11) 同前、63参照
- 12) 文部省『高等学校学習指導要領解説 家庭編』、63、開隆堂出版株式会社 (2000) 参照
- 13) 同前、35-37参照
- 14) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』、64、教育図書株式会社 (2008) 参照
- 15) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 家庭編』、31、47-48、52、開隆堂出版株式会社 (2010) 参照